

山頭火

「水の如く湧き、水の如く流れ、 水の如く詠いたい」

種田山頭火（1882-1940）は明治、大正、昭和初期にかけての自由律俳句の著名な俳人。本名・種田正一。1913年に萩原井泉水主宰の自由律俳句誌「層雲」に入門し、この頃から山頭火と名乗るようになる。関東大震災後に熊本市の曹洞宗報恩寺で出家得度。1925年に寺を出て西日本を中心に雲水姿で旅しながら句作を行う。代表作に「分け入っても分け入っても青い山」などがある。

果てしなき流転の旅人

山頭火は山口県防府市の大地主の家系に生まれた。旧制山口中学から早稲田大学文学部に入学し

たものの神経衰弱を患って中退し、療養しながら家業の造り酒屋を手伝った。

しかし父親の放蕩とみずからの酒癖で破産し、妻子を連れて九州の熊本市に移住する。だがそこでもうまくいかず離婚して東京に出奔した。

1923年に関東大震災に遭って熊本に逃げ帰り、生活苦などで自殺未遂を起こした。そのとき報恩寺の住職・望月義庵に助けられて参禅の道に入る。

2年後に寺を離れ、福岡、宮崎、山口など流転の旅をつづけながら1932年に郷里の山口に戻って其中庵を結んだ。1939年には四国の松山市に移り住み、翌年10月に最後の住みかとなった一草庵で58歳の波瀾に富んだ生涯を終えた。

みずから日記で「解くすべもない惑ひを背負うて行乞流転の旅に出た」、「愚かな旅人として放浪するより以外に私の生き方はないのだ」と記しているように、その一生は旅から旅への果てしなき行程だったといっても過言ではない。山頭火の名を後世に残すことになった自由律俳句も、その多くが旅の途上で生まれた。

酒ではなく水への讚美へ

句作では自由律俳句のシンボルとして同じく井泉水門下の尾崎放哉と並び称される存在となっている。生涯をつうじて詠んだ句は約84,000句にのぼるといふ。

とくに「水」に関する句が多く、逆に「酒」に関する句は数えるほどしかない。「酒」で失敗した人生への反省が「水」に対する讚美につながっていったのかもしれない。

「水」に関する山頭火の代表的な句をいくつか紹介しておこう。

こころおちつけば水の音

こんなうまい水があふれている

ふるさとの水をのみ水をあび

ほんによかった夕立の水音がそこここ

もらうてもどるあたかな水のこぼるるを

飲みたい水が音たてていた

山の水はあふれてあふれて

春が来た水音の行けるところまで

立ちどまると水音のする方へ道

いずれも旅の途上や日々のつましい暮らしの心象風景を稚拙ともいえるストレートさで綴って



いる。この明快で技巧を感じさせない親しみやすさが山頭火の人気を根底から支えているといっている。この明快で技巧を感じさせない親しみやすさが山頭火の人気を根底から支えているとい

水に自己の生きざまを象徴する

山頭火ほど「水」に惹かれた俳人はほかにいない。水はたんなる飲みものや使うものにとどまらず、流転の旅ともいうべき紆余曲折に充ちた自身自身の生きざまを主体的に象徴するものとなっている。

1931年に発行した「三八九」第三集で山頭火は「水を活かせるだけ活かすというのが禅心の心づかいである」として出家するまえの自分は「水を使うよりも自分に溺れていた」と述懐している。そして「私は水の如く湧き、水の如く流れ、水の如く詠いたい」と文字どおり自己と「水」をひとつに重ねあわせている。

生きることの辛酸を舐めつくした山頭火にとって「水」は生命力そのものの限らない源泉だったにちがいない。

（高倉）

参考文献

『山頭火句集』ちくま文庫

『山頭火随筆集』講談社文芸文庫

『種田山頭火 漂白の俳人』講談社現代新書

『山頭火』文春文庫

『種田山頭火の死生ほろほろほろびゆく』文春新書

